

## 会員新刊紹介

釤貫亨・宮地朝子 編

### ことばに向かう日本の学知

名古屋大学大学院文学研究科では、二〇一〇年九月九日から一一日にかけて「ことばに向かう日本の学知—テクスト解釈の集積としての学史—」というテーマの国際研究集会が行われた。その集会では、日本国内の研究者だけではなく、海外でも研究実績を積み上げている研究者も招かれた。本書はその研究集会をまとめた報告書である。

本書の主要編者である釤貫亨氏は、今日の日本語学は、総合的な「学」から一八世紀以降論理的骨格が見通せる個別具体的な「学説」へと展開してきたとし、日本語学史とは「学史」と「学説史」との重層構造から成ると述べている。また同氏は、他の執筆者の方々が、「学史と学説史に関する如上の筆者の考えに必ずしも賛同しないであろうが、」と控え目ながらも、本書が日本語学史と学説史の新鋭の成果が堪能できるものであることを主張するのに、躊躇していない。

本書の構成と執筆者は次の通り。

「学史と学説史—序論に代えて」釤貫 亨

「言語作品の総合モデル化」カレル・フィアラ

「近代日本の文法学成立における be 動詞解釈—記述文法学獲得への道—」金 銀珠

「山田孝雄「喚体句」着想の淵源」宮地朝子

「『手爾葉大概抄』読解—「手爾葉」と「詞」—」小柳智一

「時枝誠記のへ主体的立場」とソシュールのへ話者の意識▽—へ言語の科学▽と解釈学—」松澤和宏

「消滅の危機に瀕する琉球語文学の研究」かりまた しげひさ

「漢字文化圏における近代語彙の伝播の一例—『漢城旬報』を中心に」李 漢燮

「翻訳以前にテキストを考察する方法の実例—謡曲の鶴

鶴小町のテキストを踏まえて—」ズデンカ・シュヴァルツォヴァー

「専門知「国語学」の創業—橋本進吉の音韻史—」釤貫亨

「日本悉曇学と『韻鏡』」肥爪周二

「近世語学 “輕重”義」岡島昭浩

「明治期国学と国語学」山東 功

「万葉仮名の二類の区別はどう理解されたのか——音の区別に基づく」という考の提起と撤回——」安田尚道

「近世・近代の漢文訓読と「型」」齋藤文俊

「辞書の語釈——『言海』の漢語を緒にして——」今野真二

以上の一講演一四発表は名古屋大学大学院文学研究科

によって推進されてきた、グローバル COE プログラムに基づいている。その理論的枠組みとしては、「テクスト布置」及び「解釈学」が數かれている。しかし本研究集会は、その枠組みを援用しているというよりは、「豊富な歴史的文献資料と書誌学の伝統を持ち、またこれに対する研究蓄積を背景とした、日本語学史・日本語学説史の研究成果をそのままに提示する」ということで従来になかった新鮮な試みであると、編者の宮地朝子氏は自負している。

本書は、今日の日本語学史・学説史における、言語観察および言語観の展開変遷を多角的に接することができるという点で、先駆的な書である。

（二〇一一年一〇月刊、ひつじ書房、A4判、四二〇頁、六、二〇〇円+税）

（李 在鋪・名古屋大学大学院博士課程後期）

服部幸造・弓削繁・辻本裕成 編

『中世〈知〉の再生

『月庵醉醒記』論考と索引

本書は、三井書店から刊行されている「中世の文学」シリーズの一つ、『月庵醉醒記』の論究篇ともいえる一冊である。『月庵醉醒記』は、戦国時代末期から織豊時代にかけて古河公方家の重鎮として活躍した武将、一色直朝（以下、月庵）の著書である。月庵は歌人・画家としても知られており、「知」を後世に伝えるために諸書からの抜書きや人からの聞き書きをまとめている。中世から近世への変わり目にあつた関東の文化活動を知る事ができる書として、従来から注目されてきた。

本書の構成は、『月庵醉醒記』研究会に参加した研究者たちの研究成果をまとめた十二本の論考と補説・索引からなる。以下、目次掲載順に執筆者と論文を紹介する。

- ・服部幸造 「月庵醉醒記」の世界——中世から近世へ
- ・小林幸夫 「月庵醉醒記」の詠歌物語——歌話と故実
- ・藤井奈都子 「穆王の馬」
- ・小助川元太 「月庵醉醒記」〈政道〉考——「古人之語

### 三十一」を中心にして

- ・佐々木雷太「『月庵醉醒記』」「鎌倉の地蔵桜」攷」
- ・徳竹由明「富士の根方の法華宗の夢」考——後北条氏と富士の根方の法華宗」
- ・日沖敦子「淨土憧憬——檀王法林寺藏「中将姫臨終感得來迎図」をめぐって」
- ・榎原千鶴「道歌の効用——『月庵醉醒記』と福羽美静にみる明治期女性教育」
- ・二本松泰子「東国武士の鷹術伝承——児玉經平の鷹書と『月庵醉醒記』記載の鷹関連記事をめぐって」
- ・弓削繁「『月庵醉醒記』の〈知識〉の由来——『無名抄』依拠記事と蹴鞠記事から」
- ・辻本裕成「歌人月庵の和歌と『月庵醉醒記』」
- ・徳田和夫「風流踊歌『恋の踊』断簡考」
- これらの論考から見てもわかるように、『月庵醉醒記』という作品は、様々な視点から読み解くことが可能である。雜多な記事の中から、和歌説話・諺諧・政道・教訓・男女論・鳥獸（特に鷹）・夢想・釈教・雜話にそれぞれ焦点を当て、諸氏が考察を試みている。関東に下向して古河公方家に逗留する公家たちの接待役でもあった月庵は、服部氏が話題の提供者として名を挙げた四人、冷泉明融・飛鳥井重雅・聖護院道増・三条西実枝からの聞き

書きから、重要な役目を担う者が心得ておくべき知識を蓄えていた。しかし、弓削氏が「あたかも百科全書のごとく」と捉えたその「様々な〈知識〉」は、話題提供者や典拠を明示するものばかりではなく、「文化的位相を理解するためにはまず典拠や類似資料の探索が必要になつてくる」。そこで輪読会に参加した諸氏は議論を重ね、月庵が依拠したとされる諸書を特定してきた。そうした研究成果が表れたのがこの書である。

「補説」には『月庵醉醒記』三巻を刊行後、新たに判明したことや補訂すべき事項を載せ、索引がそれに続く。索引は「一般語彙」「漢詩句・経文等」「和歌・連句・呪歌・いいまわし等」の三種に分け、それぞれあいうえ順に配列される。「一般語彙」には、固有名詞（人名・神仏名・地名・寺社名・年号など）、普通名詞を中心にお順に配列される。「一般語彙」には、固有名詞（人名・

原文にある振り仮名・注記もへ）で記し、原文の読み貞一行」の順に現代仮名遣いで掲載し、検索の便を考え、からも探すことができるよう工夫されている。

この論考で稿者の興味を引いたのは、「啓蒙の書」という視点である。政道に携わる層、人の上に立つ立場の武将は、弓馬の故実など武芸に関する知識だけではなく、詩歌・管弦・茶道・華道・香道など諸事にわたつて身に

つけるべき教養があり、月庵の編述意図は、そうした教養を若いうちから学ぶことにある。また男女の論に娘の結婚の在り方が示されていることなどから、女性に対する教訓としても享受されたと読める面白さもある。

本書を読む上で改めて気づかされたのは、『月庵醉醒記』という作品が単なる聞き書き・抜書きではなく、読者がどのような角度からでも探求を深めることができる〈知〉の宝庫である、ということである。注釈書の刊行後、この書が新たな研究の糸口となり、未だ解明されていない謎が繙かれることに期待したい。

（二〇一二年一月一四日刊、三弥井書店、A5版、四二三頁、九、五〇〇円+税）  
(横山知恵・名古屋大学大学院博士課程後期)

本書は、二十数年にわたって高橋亨氏が支えてきた古代文学研究会（第二次）の有志たちによる重厚な論集である。

本書の書名にある「紫式部」とは、「紫式部集」「紫式部日記」「源氏物語」の表現主体、およびその表現生成を支える背景となる「物語史・和歌史・漢詩文や仏典、歴史や文化史、またそれにかかるほかの作家」などを含んでいる。本書の目的は、そうした「〈紫式部〉の作品テクストに関わる成立と享受の表現史」を総括することにある。

本書は三章立てで、各テーマは以下の通り。

- I 〈紫式部〉の問題系（13論文）
- II 〈紫式部〉とテクストの引用関連（16論文）
- III 〈紫式部〉研究史・〈紫式部〉表現史関連研究文獻目録

第一章（I）は、文化コンテクスト——「紫式部集」「紫式部日記」「源氏物語」の相互関係、〈紫式部〉を取り巻く社会環境や文化（音楽、美術、建築など）——を

高橋 亨 編

## 『〈紫式部〉と王朝芸術の表現史』

視座にした論文によって構成される。巻頭論文は、高橋亨氏の「〈紫式部〉論への視座」。身の限界を克服し、どのように生きることが可能かという「心」を探求した女君たちの物語としての『源氏物語』と、〈紫式部〉の思考の軌跡を記した『紫式部日記』との対応関係を明示することによって、「身の憂さ」をエネルギーにして物語を書き進めていく〈紫式部〉の姿を明らかにした。安藤徹氏の論考（「かきませ」る〈紫式部〉）は〈紫式部〉を「説明原理でも収束点でもな」く、「実体でもないし、可能性ですらない」とし、〈紫式部〉論のありかたに注意を促す。

第二章（II）では、〈紫式部〉以前、以後のテクストと〈紫式部〉の交渉が様々なに論じられる。兼輔・貫之などの歌を〈紫式部〉がどのように受容したのか、また清少納言ら〈紫式部〉と同時代の女房達は〈紫式部〉に対しどう意義づけできるのか。表現者〈紫式部〉の様々な位相が浮かび上がった。さらに、『竹取物語』『伊勢物語』などの先行する物語の、『源氏物語』における引用のありかた、『大鏡』『栄華物語』における『源氏物語』の位相が問題とされ、中世の文学・芸能や〈紫式部〉享受者のあるようが論じられている。

第三章（III）では、外山敦子氏「〈紫式部〉への史的

展開」によって、〈紫式部〉研究史と、今後の課題が提示された。詳細な研究文献目録も実用的である。ほか〈紫式部〉関連系図、関連文学史年表と、索引を収録する。

〈紫式部〉は驚くほど多様であり、そのあらゆる「問題系」を見出すことができる。『源氏物語』研究者はもとより、文芸・表現を学ぶあらゆる人々に一読をすすめたい、良著である。

（二〇一二年二月刊、森話社、A5判、四九七頁、一一〇〇円+税）

（咲本英恵・共立女子大学教育助手）

## 加藤弓枝 著

『細川幽斎』（コレクション日本歌人選033）

細川幽斎（天文三年（一五三四）～慶長十五年（一六一〇））は、足利将軍家・織田信長・豊臣秀吉・徳川家康に仕えた武将で、通称を兵部太輔、名を藤孝といい、天正一〇年（当時四九歳）に本能寺の変が起ると、剃髪して幽斎・玄旨と号した。武芸はもちろん、和歌・連歌・蹴鞠・料理・音曲・茶湯・刀剣鑑定・有職故実等、多方面の学芸に通じた当代きっての文化人であった。特に二条派歌学の大成者として知られ、公武のいすれから

も重んじられた。滑稽を好み、狂歌・俳諧の作をも多く残した。その影響は、雅俗両面に亘って、遠く後代に及んでいる。

本書は、和歌文学会の監修のもと、「日本の歌の歴史」に大きな足跡を残した代表的歌人の秀歌を、堪能できるよう編んだ初めてのアソロジー、全60冊のうちの一冊として刊行された。幽斎の歌の鑑賞を中心に、巻末に「歌人略伝」「略年譜」「解説」「和歌を武器とした文人細川幽斎」「読書案内」を所載、「付録エッセイ」として小説家松本清張の「細川幽斎」を抄出する。歌の鑑賞の部分は、永禄九年（三三歳）以前の詠作と推定される「今ははや心のままに積もるらし嵐の後の松の白雪」から慶長一四年（七六歳）の「武藏野も果てはありなん行くもわが恋草の種を尋ねて」まで、計五〇首（和歌四九首、狂歌一首）を選出し、一首を見開き二頁で評釈する。

本書の特色は、幽斎の歌を年次順に配列し、詠作時ににおける幽斎の社会的、文学的状況を整理してゆくことで、幽斎にとっての文事の意味を読み解こうとするところにある。本書は、戦雲に蔽われた世を幽斎がどう渡つていったのか、一筋の流れを浮かび上がらせるとともに、伝統的な詠み方との対比から、幽斎の歌に見られる作意を明

らかにする。例えば、天正一〇年の夏歌「風の音村雲ながらきほひきて野分に似たる夕立の空」が、鎌倉時代後期の歌人京極為兼の「野分だつ夕べの雲の足はやみ時雨に似たる秋のむら雨」等、「玉葉集」や「風雅集」所収歌に学んで発想表現されていることや、天正一五年の賀歌「剣をばここに納めよ箱崎の松の千歳も君が代の友」が、九州平定を果たした主君秀吉の治世が永続するよう、筥崎八幡宮の神木で国家鎮護の象徴の「しるしの松」に、秀吉の一字名の「松」を重ねて詠出されていることに言及する。このような、先行歌の指摘に懇切丁寧で、印象批評を排した説明は、本書に一貫する執筆姿勢となつている。

文学と史学、双方の研究成果を踏まえた本書の記述は、その簡潔さと平明さも相俟つて、研究者だけでなく、初学者にも手に取りやすい内容となつていている。

（二〇一二年三月刊、笠間書院、A5版、一九頁、

一、二〇〇円+税）

（対田将樹・名古屋大学大学院博士課程後期）

高橋亨・久富木原玲・中根千絵 編  
『武家の文物と源氏物語絵 尾張徳川  
家伝来品を起点として』

本書は日本学術振興会の科学研究費補助金による研究プロジェクト「戦（いくさ）に關わる文字文化と文物の総合的研究」の一環により成され、以下の二章から構成されている。

第一章、徳川美術館・蓬左文庫伝来品の諸相

第二章、源氏物語をめぐる文物の諸相

ここには一四人の研究者による論考と資料紹介が收められ、「源氏物語」がいかに日本文化の根幹たりえてきたかが、さまざまな視点から取り上げられており、「武家」と「源氏物語」という、一見すると相容れないものが、江戸時代の徳川家においては、公家から武家へと繼承され、基本的な教養の具として捉えられていたことが証明されている。

そして、本書の「見どころ」の一つは、「原色彩を再現する印刷による製本が実現され（「あとがき」による）」、贅沢な図版と頁を繰るたびに出会えることである。詳しく述べ、本書を手に取って御覧頂きたいが、第一章では愛

知県立大学蔵の資料が豊富に紹介され、「『源氏物語絵色紙』紹介と解題」、「『ことさの図』紹介と解題」、「版本『古今著聞集』の挿絵」、「奈良絵本『しんきよく』翻刻」、「本朝月鑑」翻刻と紹介」は、物語と絵の問題を考えるうえで大変貴重な資料を提供してくれている。第二章では、現代にまで「文化」として継承される源氏物語について、絵巻にとどまらず、浮世絵や版本、戦時中の国語教科書など、多岐にわたる様相について考察されており、現代の〈源氏文化〉を考えるうえで、欠くことのできない視点を学ぶことができる。中でも「清原雪信の「源氏物語画帖」とその画風」は、個人蔵の資料を豊富に示し、これまで一般にあまり知られていない女流職業画家を取り上げる。

本書を通じて、「源氏物語」がいかに〈文化〉として命を得てきたのかを知ることができるはずだ。同時に、こうした土壤がどのような未来を拓くかが、大きな課題として示されたようにも思った。

「眼福」の言葉がふさわしい素敵な一冊である。

（二〇一二年三月十五日刊、翰林書房、B5判、四九六頁、

定価六、五〇〇円＋税）

（亀田夕佳／愛知淑徳大学）